

Shelley: “The Woodman and the Nightingale” の一解釈

高 橋 規 矩

I

Desmond King-Hele が、長さにして僅か70行の抒情詩、“The Woodman and the Nightingale” (1818) につけた短評——「鳥やドリアドス [dryads, すなわち、ギリシア神話で、森、特に、⁽¹⁾ 樾の精とされ、棲んでいる木と運命を共にすると信じられていた] を弁護した美しい断片」——その他、二・三の言及を除けば、この詩は、そこに採用されている三韻句法 (*terza rima*) の詩形の美音と描写されている世界の魅惑力をそなえているにもかかわらず、研究の対象としてあまり取りあげられたことがない。この小論の意図は、上に引用した King-Hele の発言をいまいし掘り下げて、詩題となっている樵と夜鶯とが、それぞれ何を表わしているか、相互にどのような関係があるかを探究することによって、この詩に対して一つの解釈を試みようとするものである。

II

鳥を詩の題材として取りあげた詩人という観点から言って、Shelley を浪漫主義詩人たちの中で特異な詩人たらしめているのは、多くの場合、彼が鳥をして人間精神の相異なる二つの作用、すなわち、想像力と理性の中のいずれか一方を象徴させ、それに基づいて、真実と虚偽、善と悪という相対立する概念にそれぞれを結びつける傾向を示しているからである。⁽²⁾ 例えば、彼の詩を見ると、“Lines: ‘When the Lamp is Shattered’” では、大鴉 (raven) は力強いものの譬喩として (IV, 2), *Adonais* で、屍の上でわめきたてる忌わしい大鴉は、酷評家の譬喩として (XXVIII, 2), 秃鷹 (vulture) は、*Prometheus Unbound* の第一幕で、Prometheus の肝をひき裂きつばむ、悪神 Jupiter (=Zeus) の使者として、また、*Adonais* でも、疫病をふりまく征服者の旗に忠実なものとして (XXVIII, 3), 絶筆となった *The Triumph of Life* でも、秃鷹は、俗世の腐敗にとりつかれた法皇の王冠にとまっているものとして描き出されている (ll. 496-497)。雲雀 (skylark) は、“To a Skylark” で、詩人に譬えられ (l. 36), 鶯 (eagle) は、*The Revolt of Islam* の場合を除けば、善霊として、また、詩的精神の力強い翼、生命力、再生の譬喩として用いられている。

Shelley の散文においても、上に述べた詩の場合と同様なことが言える。Shelley の文学批評のカナメとなっている、想像力と理性の弁別、道徳的・詩的生活における想像力の重視などを述べている、1821年3月頃書かれた書簡の断片に、極めて興味深い鳥の譬喩が見うけられる。

「彼 [T. L. Peacock] は、『生命の太陽』である『想像力』を消してしまい、彼が『理性』と呼んでいる『月』の冷い、不確実な、借りた光をたよりに手さぐり進もうとする

が、俗世の暗い深淵では、彼は『月』に見捨てられてつまづきころびつゝ、鶯というよりは梟のように、蒼白い『天の女王』である龐な天球をみつめただけで目を回してしま⁽³⁾うのである。」

こゝに言及されている「彼」とは、言うまでもなく、理性の時代とも言うべき現代においては詩は無用であると *The Four Ages of Poetry* で説いた T. L. Peacock のことである。Peacock は、この論文の中で、理性と、これに対立する意味内容をもつ単語として、空想 (phantasy) という言葉を使用しているに過ぎないので、上の引用に見られる、理性一月一梟と、想像力—太陽—鶯という二つのグループ内での相互の象徴関係は、Peacock からの影響とは言えないと思う。この書簡の断片に述べられた構想に基づいて執筆され、Shelley の文学批評の原理が説かれている *A Defence of Poetry* でも、Shelley は、同様な調子で、力強い鶯の翼をもった想像力と梟の翼をした理性とを対立させながら、「梟の翼の計算の能力」(the owl-winged faculty of calculation) では到底飛翔出来ない久遠の地から、想像力が光と火とを招来しな⁽⁴⁾かったら、徳も愛も友情も、墓の此方の慰めも墓の彼方の憧憬も一体どうなったであろうか、と想像力が単に詩の創造においてのみならず、人生においても等しく不可欠であることを強調している。

この小論の目的にとって、Shelley が、通常、総合の原理である想像力には鶯の翼を、論理・分析・計算の原理である理性には梟の翼を与えていることは極めて大切なことである。それでは、夜鶯は想像力と理性とに対してどのような関係があるのであろうか。この質問に対して、*A Defence of Poetry* からの次の一節が、はっきりとした解答を与えてくれる。

「詩人は、夜鶯であって、暗闇の中に坐して、自らの孤独を美しい声でなぐさめんと歌う。その歌声に耳を傾ける人々は、姿の見えぬ歌い手の美しい歌声に恍惚となり、心を動かされ和らぐのを感じながらも、その声がどこからくるのか、何故そうした気持になるのか分らぬのである。」⁽⁵⁾

この一文から、夜鶯は、梟よりは鶯の如く、理性にではなく想像力に対して密接な譬喩関係にあることが明らかである。聞くもののすべてを恍惚境に誘いこむような、妙なる調和ある音楽を奏でるもの——、これが詩人であり、夜鶯である。

III

このような象徴関係を念頭においた上で、次に、“The Woodman and the Nightingale” において、樵と夜鶯が一体何を意味しているのかを検討して見よう。

この詩にあらわれる夜鶯も、*A Defence of Poetry* から引用した一節に述べられている夜鶯に非常に似ている。すなわち、夏に、葉の茂る森の中に、一羽の夜鶯が「空腹な暗闇」(the hungry dark) に霊妙なメロディーを与えることによって、その空腹を充してやっている (ll. 4-5)。この「暗闇」は、霊妙なメロディーで初めて満腹を感じるものであって、決して物質的なものを求めているのではない。そこにみなぎる宗教的な雰囲気こそがそうさせていると考えられる。谷にあふれる水の如く、空に充満する月光の如く、或る印度の谷に一杯

に漂よう月下香（ツペローズ）の芳香の如く、夕方が訪ずれる度毎に、「この美音の森」（this sweet forest, l. 12）の幸福な夜鶯の歌曲は、その界限の静けさの上に広がってゆく。あらゆる生あるものは、みな、Shelley は山川草木のすべてに声と生命を与えたのであるが、夜鶯の鳴く声に恍惚となって耳を傾け、その恍惚たる喜びに浸るのである。詩的な、想像的な喜びは、理性的な作用を超越している⁽⁶⁾ので、その歌声の聞き手には、その歌声がどこからくるのか、また、何故に彼らが心の感動をおぼえるのか、分らない。

扱て、こゝで、夜鶯の音楽が森の雰囲気と融合し一体となり、宗教的なものにまで高揚されていること、詩からの引用を用いれば、religion (l. 59), such brief unison as on the brain (l. 65), one tone (l. 66), one accent (l. 67) となっていることに留意しなければならない。森羅万象を見事に調和さす音楽の効果は、*Epipsychidion* でも詠まれている。

And every motion, odour, beam, and tone,
With that deep music is in unison:
Which is a soul within the soul—they seem
Like echoes of an antenatal dream.— (Ll. 453-456)

（あらゆる動き、香、光も音も、すべて
その深き妙楽と調和する、
楽は一切の霊の中の霊、これらすべて外なるものは
生前の夢のこだま。）

また、*Prometheus Unbound* で、愛の導入によって得た自己解放を喜ぶ Prometheus は、実現が近づいている理想郷を描写しながら、

And we will...
...like lutes
Touched by the skill of the enamoured wind,
Weave harmonies divine, yet ever new,
From difference sweet where discord cannot be. (III, iii, 34-39)

（わたしたちは…
うっとりとした風が巧みに触れるルートの調べのように
神々しく、いつまでも新しい諧調を織りなす、
この楽には、不協和音こそないが
美しき音の変化がある。）

と自らの抱負を語っている。

「この美音の森」の夜は、今やそこに棲むすべての生あるものに、俗界を超越した宗教心を懐かせる「夜の神殿」(the temple of the night, l. 33) である。そこには、「宗教」——Shelley にとっては、真実の宗教とは、万物を抱擁し、万物に充満する「愛の」宗教である⁽⁷⁾——があり、

...and the mute
 Persuasion of unkindled melodies,
 Odours and gleams and murmurs, which the lute
 Of the blind pilot-spirit of the blast
 Stirs... (Ll. 59-63)

(静かな感化力もつ感きわまる前のメロディーと、
 香と微光と、
 風を導く盲た霊のならすルートの
 つぶやきと。)

が浸透している。夜鶯の出没する場所をバルナソスのような聖域とする大胆な譬喩は、Shelley においても、これが初めてではない。“The Woodman and the Nightingale”の執筆の前の年(1817)に始められ、この詩と同じ年に完成された *Rosalind and Helen: A Modern Eclogue* にも、the poet-bird なる夜鶯が、「天によって教授された物語」(her heaven-taught tale)を、すなわち、「あたり全体に鳴りわたる詩歌」(the heaven-resounding minstrelsy)を歌っている一つの「淋しい神殿」(that temple lone)に、Helen が夫 Lionel によって導かれてゆく詩行がある(II. 1116-1130)。そして、更に、夜鶯の歌を、静かな夜半に、天から聞えてくる天体の音楽とする譬喩は、*Epipsychidion* の「恍惚境にて聞かれる天体の楽の調べ」(stops/Of planetary music heard in trance)と一致するものである。

IV

このようにして、Shelley においては、夜鶯は、詩人と想像力とに対して密接な象徴関係をもっていることが明らかになった。それでは、樵はどうであろうか。夜鶯と樵との対立関係を詠んでいる詩行は、これに対する示唆を与えている。それは、詩の最初と最後の二つの部分に見られるので、次に引用しよう。

(1) A Woodman whose rough heart was out of tune
 (I think such hearts yet never came to good)
 Hated to hear, under the stars or moon,

One nightingale in an interfluous wood
 Sate the hungry dark with melody;— (Ll. 1-5)

(樵の頑なな心は調和を知らず、
 —かような心は善を知らぬ—
 彼が聞くのを嫌ったものは、星空の下、月光の下、
 うっそうたる木々の茂る森の中、空腹なる暗闇に糧として
 夜鶯が与えるメロディー。)

- (2) The world is full of Woodmen who expel
 Love's gentle Dryads from the haunts of life,
 And vex the nightingales in every dell. (ll. 68-70)
 (この世は樵ばかり、
 追われるは、やさしき愛のドリアドス、この世の棲家から、
 悩まされるは、夜鶯、すべての谷で。)

楽しい音楽が理解出来ない、頑なな心をした樵は、夜鶯の歌声を嫌って耳をかさないどころか、夜があけると、彼は斧と鋸とをふるってドリアドスの棲んでいる大木を次から次へと切り倒し、森の神聖な宗教的な雰囲気破壊し、ドリアドスと夜鶯とを追払ってしまう。夜の名状し難い一大調和の音楽に対して、昼間は何という荒々しい不協和音、「耳をつんざく音楽」(stunning music, *The Triumph of Life*, l. 435) が響くことであろうか。幹に打ちこむ重い音、小刻みにやかましい鋸の音とまじって、木の裂けて倒れる音が聞えるようである。緑濃い森の所々には、黒々と大きい穴があいて、森の緑の調和を醜く穢してゆくのが見えるようである。

要するに樵は合理的、世俗的利益の追求者である。樵が文字通りに木を切ることを職業としている者のみを意味しているのではなく、「愛」と交渉出来る唯一の手段である想像力(8)を捨て、理性のみにたよって行動する「単なる理性論者」や、彼らに追従するものたちをも表わしていると考えられる。このような象徴の仕方は、Shelley の多くの作品に見られるところである。

そこで、夜鶯が想像力か詩人を、樵が理性と理性論者を表わしているという立場から、最後に引用した、この詩の最後の三行 (ll. 68-70) を解釈すると次のようになろう。すなわち、現在、この世には鳥の音楽や天体から聞えてくる音楽を理解しないのみならず、これを妨害する連中がはびこり、専ら世俗的な利益の追求にあくせくと汗を流して日夜生の活力を徒に消耗している、と。この詩行には、バルナソス山からの「愛」の詩人の追放に対する Shelley の悲しみ、憤り、皮肉などが一緒になって爆発したと見なし得るのである。

V

この小論では、“The Woodman and the Nightingale” にあらわれる樵と夜鶯とが、それぞれ表わしているものの間の対立は、*A Defence of Poetry* などに見られる、理性と想像力、理性論者と詩人(芸術家のこと)との対立と照応するものであることを見た。恐らくは詩材の類似性から、Shelley は、Coleridge の“The Raven” (1797) によって、この詩の主題を示唆されたのであろうという推測もあるけれども⁽⁹⁾、もしそうだとすると、樵と鳥に対して与えた、このような Shelley 独自の象徴的意味のために、その結果は、Coleridge のものとは甚だしく異なったものとなった。Shelley の詩では、夜鶯の流れるような諧調と和音の調べとがかもし出す宗教的な雰囲気にかちた真実の世界と、同情心のない樵の破壊と不協和音の世俗的な世界(「不協和音と訳の分らぬ仕組よりなる／この悪しき世界」, “Letter to Maria Gisborne,” ll. 159-160) との対照が極めて鮮やかに描き出されているのである。

(昭和44年9月9日 受理)

注

- (1) Desmond King-Hele, *Shelley: The Man and the Poet* (New York, 1960), p. 113; cf. Peter H. Butter, *Shelley's Idols of the Cave* (Edinburgh, 1954), p. 99.
- (2) 勿論, Wordsworth, Coleridge, Keats にも同様なことが言えるので, この意見はあくまで程度の問題として理解されねばなるまい。しかし, Donald H. Reiman は, Shelley においては, 「熱さと冷たさ, 明かるさと暗さ, 泉と鴉, 葦と薔薇, 太陽と月などは, すべて倫理的・認識論的な諸概念の象徴となっていた」と断言しているほどである。See Donald H. Reiman, *Shelley's "The Triumph of Life": A Critical Study* (Urbana, 1965), p. 11.
- (3) Frederick L. Jones, ed., *The Letters of Percy Bysshe Shelley* (Oxford, 1964), II, 273.
- (4) *A Defence of Poetry, Shelley's Literary and Philosophical Criticism*, ed. John Shawcross (London, 1932), p. 153.
- (5) *Ibid.*, p. 129.
- (6) *Loc. cit.*
- (7) E. g. "Harmony became love/In every soul but one" (ll. 38-39).
- (8) Shawcross, ed., *op. cit.*, p. 150n.
- (9) King-Hele, *op. cit.*, p. 114.

Summary

AN INTERPRETATION OF SHELLEY'S
"THE WOODMAN AND THE NIGHTINGALE"

Norikane TAKAHASHI

The author's attempt in this paper is to interpret "The Woodman and the Nightingale" by clarifying the symbolic meanings of the two key words, 'woodman' and 'nightingale.' Having used available materials beside the poem, he concludes: that the 'nightingale' symbolizes a poet or his imagination, while the 'woodman' represents a mere reasoner or his reason, and that, if so, the poem must largely involve Shelley's protest against most of his contemporaries who, employed in their worldly pursuits, looked with less regard upon a poet and poetry as an expression of his imagination.